マンハッタン・ラプソディ

池田満寿夫

マンハッタン・ラプソディ

池田満寿夫

角川書店

マンハッタン・ラプソディ

©Masuo Ikeda,1982
Printed in Japan
0093-872343-0946(0)

昭和五十七年六月十日　初版発行
著者――池田満寿夫
発行者――角川春樹
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三　電話(〇三)二六五―七一一一〈大代表〉郵便番号一〇二　振替東京三―一九五二〇八
印刷所――大日本印刷　製本所――宮田製本所
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

目次

Ⅰ・鯨の卵巣の中で――5
Ⅱ・ハドソン河に薔薇一輪――27
Ⅲ・G・ストッキングの朝食――43
Ⅳ・マンハッタン・ラプソディ――71

装幀——勝井三雄

装画——池田満寿夫

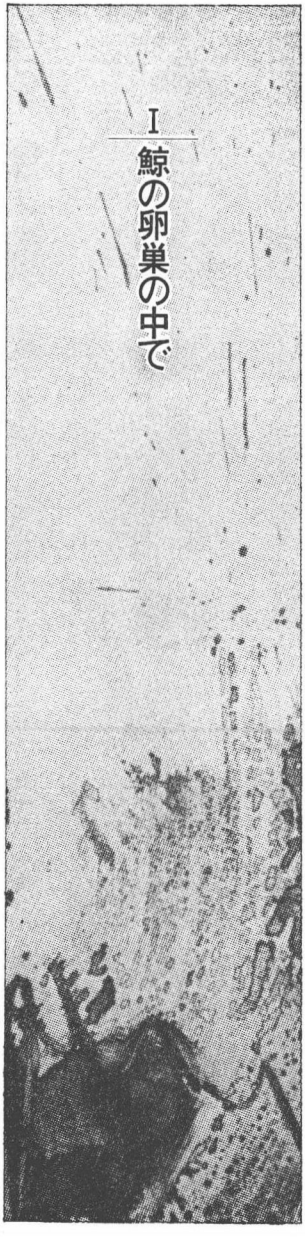
表紙・劇場の入口（名もなきある街）一九六九
裏表紙・ふくろう（ロケーションアンドシーン）一九七〇

見返し写真——奈良原一高

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

マンハッタン・ラプソディ・池田満寿夫

長編小説



I 鯨の卵巣の中で

難ぎ倒されそうな暑さだ。

スタジオの窓は全部開け放たれている。風の代りに通りからの熱気と騒音しか入って来ない。

日曜なので通りのトラックの交通量は十分の一位だろう。右に直進すると、ニュージャージーに通ずるホーランド・トンネルの入口に連絡している。平日だと朝の五時から真夜中まで、跡切れることなく大型トラックが地響きをたてて通過する。大通りではないが、対岸のクインズからマンハッタンを横断してニュージャージーに出るにはこの通りが最短距離になっているからだ。

昨年の十二月、ロスアンゼルスから来て、この七階建てのロフト・ビルの五階を借りた。グランド通り六十八番。大工のマルケスが使っていたものだ。ロフト・スタジオに住むのははじめてだった。倉庫を改造して、今のように人間が住めるようにしたのは大工のマルケスだ。一年半住んでいながらレンガの壁は白く塗られているが、天井と床は手入れしていない。

その分だけ値切ってやった。もっとも二百ドルしか負けなかったが。オガクズを取りのぞくのに五日はかかった。天井の煤払いまでは手が廻らない。六階のナンシーが歩くと天井からほこりが舞い落ちてくる。ナンシーも画家だ。うんこ色としかいえない色一色で宇宙と称するものを描いている。髪の毛までうんこ色している。交渉がないので、どうやって食っているのか解らない。このビルの持ち主が度々彼女を訪れているのを見ているだけだ。股を広げて家賃をタダにしているらしいと四階のボブが報告してくれた。クジラのようなカントしか持っていないだろう。なにしろ真夜中からクジラの鳴き声のレコードを最大ボリュームで鳴らしっぱなしなのだ。そして何人目かの男とダンスを踊る。床の上に転がって足をばたつかせる。その度に、暗闇の中を天井から白いほこりが舞い降りてくるという寸法だ。

三日前の夜だ。

ナンシーは夜中の二時頃帰って来た。手動式のエレベーターが六階で停り、ポリス・ロックをがちゃがちゃ鳴らし、重い鉄の扉を開けて、スタジオに入ると、間髪を入れずにクジラの鳴き声が聞えて来た。日本のある作家に言わせるとクジラは平和のシンボルだが、ナンシーはクジラの音楽を聞きながら、狂暴にあばれ回る。丁度頭の真上で、彼女は巨大なお尻を床にすりつけて、何か得体の知れない鋭い音響を立てはじめた。何かが床に突きささる音だ。暑さでただでさえ眠れない夜だ。電話で警告するつもりで起きあがったが、彼女の電話番号は知らなかった。ナンシーだけで姓も知らない。電話帳で探すことも出来ない。とりあえず

電灯をつけた。天井を見あげる。ナンシーのホットなお尻が二メートル上で加熱しているだろう。天井を這っている露出したパイプだけが白ペンキで塗られている。それも途中までで、残りは赤くさびたまま放置されている。マルケスは今頃はフロリダで年金生活者たちの別荘の風呂場のタイルにバラ模様のペンキ絵を描いているだろう。ニューヨークで奴の女房が浮気したのでここが厭になったのだ。そばかすだらけでいつも目のふちを赤くしていた背の低い女だったのに。マルケスにしても何もパイプを半分塗り残したままフロリダくんだりまで出掛けなくても良かったのだ。

階段を登って六階へ行き注意しようかどうか迷った。床に突きささる音は続いている。クジラのカントが哺乳類の最後の子守唄を奏で、加熱したナンシーの哺乳器がコニーアイランドの砂のようにぬるぬる湿っているだろう。キッチンのカウンターの上の飲み残したバーボンを一息で飲み干す。ケンタッキーの小便の味だ。ナンシーのうんこ色の髪の毛と油絵を見に行くにはふさわしいかもしれない。

真暗な廊下に出てから、鍵を掛けておくべきかどうかを考えた。六階に行って帰ってくる間の数分間に何者かに侵入される危険がまったくないと断定出来ない。すでに強盗が三階に到達しているかもしれない。家主は一度切れてしまった廊下の電灯を再びつけようとはしないのだ。ビルの連中も自費でつけようとはしない。懐中電灯のバッテリーも無くなっている。懐中電灯を英語で何と言うか不意に憶い出そうとしたが出てこなかった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

鉄のドアを閉めると鍵穴さえ見えなかった。部屋の明りがもれてこないからだ。成程、ポリス・ロックだけのことはある。鍵屋は六か月保証すると言った。そのかわり三倍も払ったのだ。ライターをつけて、鍵穴を見つけロックした。

手すりを伝わりながら階段を登り、六階のナンシーの扉の前に着いた。ノックする。ここも鍵穴はふさがっている。同じように廊下の電灯も切れたままだ。平等という意味では家主のガール・フレンドも同じなのだ。

――誰？

四度目にナンシーのかん高い声が聞えた。

――ケンデスヨ。五階ノ。

――何ノ用？

――トニカク、開ケテクレマスカ？

扉が開くと、彼女のスタジオ内は薄暗かった。向い側のビルの明りの反映で、かろうじてナンシーの顔が判断出来るくらいだ。

彼女のスタジオを訪れたのはこれで二度目だ。よく見えないが三か月前とはすっかり変った感じがする。窓ぎわの床に動物の骨が一面に散乱していて、天井から無数の縄がぶら下がり、その先端に骨らしきものが結びつけられている。クジラの鳴き声と不快な臭いと異様な光景とで喉の奥に灰を詰められた感覚に襲われた。こういう時は少しほほえんだ方がいい。

あるいは大袈裟な身振りで驚いてみせる。

――何ノ用ナノ？

ナンシーの方から待ち切れずに再び聞いて来た。顔が土色で目の下が黒ずんでいる。灰色のにぶい光で瞳が空洞に見える。

――音ヲ小サクシテクレマスカ？　眠レナインデスヨ。

――解ッタワ。ソレカラ？

――変ナ鋭イ音ガシタンデス。何デスカ？

ナンシーの眉が動き、鼻孔が少し脹らんだ。それからあごを幾分持ちあげ、視線を窓の方に移した。開け放たれた向いのロフト・ビルの窓からロック・バンドの響きが通りに流れている。ここからだと建設中のワールド・トレード・センター・ビルの明りがすぐそばに感じられる。これが完成すればエンパイヤー・ステイト・ビルを何メートルか越す高さになるはずだ。その時までニューヨークにとどまっているかどうかは解らない。昨日、東京のモモコから手紙が来た。いつ帰るつもりなの？　魚が呼吸するようにモモコはそういい続けているだけだ。こちらも鳥が鳴くように、個展が出来るまで、とくりかえしているだけだ。

視線をこちらにもどすと、ナンシーは腰を振りながら奥の方へ歩いて行った。この暑さのなかで皮のスラックスをつけ、ブーツまではいている。上半身は男物のYシャツを着ている。ブラジャーをしていないのが明瞭に解る。彼女のあとをついて行くべきか、躊躇した。骨の

散乱する床に足をふみ込む気がしなかったのだ。多分これらのオブジェと名付けられるものは、ナンシーのアートに幾分関係があるのだろう。うんこ色のアクリルの絵よりはましかもしれないが。注意深く眺めると骨の一つ一つに微妙に色彩がほどこされている。光量がたりないので、何色か判定しにくいが。最近のアメリカの女性美術家たちはノーブラジャーでブーツか踵の高いサンダルを愛用し、髪の毛にくしを入れないで放置し、鉛製のインデアンの腕輪と不ぞろいの貝がらの首飾りをし、化粧するのを嫌うスタイルを好んでいるようだ。馬小屋から小便のしみたワラを集めて来て蛇状にあみあげたり、ビルの焼跡から盗んで来たシーツにプラスチックの液体をかけて、犬の内臓を形どり、画廊へかつぎ込む。イヴ・コンラッドは勇敢にも自分のカントの拓本をつくった。心優しきイングリットは口紅だけで男根を巨大なカンバスに描いた。女たちは即物的になり、男たちは形のないものに逃げている。

ナンシーは現代のゴッホだと自認している。ピストルのかわりにＬＳＤで錯乱し麦畠のつもりでうんこ色を塗りたくっている。もっとも、それは自称フォトグラファー兼画家のボブの報告だ。彼はファン・アイク流のリアリズムしか信じていない。彼によればリアリズムとは陰部を克明に描写することである。芸術家にとって体毛の描写が一番難しい。ボブはモデルである女房のヘレンの陰毛を剃ってしまったとのことだが、ヘレンの下半身をこの目で確かめたわけではない。それでも彼等は小市民的に愛し合っている。このビルでまだ一度も離婚経験を持っていないのは彼等だけだ。田舎者なのさ、と気まり悪そうに言って、大男のボ

ブ・フェイザーが顔をピンク色に染めたのが可愛かった。

――コッチニ来ナイ。

ナンシーが奥の陰の方からそう言った。皮のスラックスのお尻をつき出し、かがみ込んだ姿勢の、お尻の先端にわずかだが光が揺らいでいる。そこだけ穴があいているように見える。クジラの遠吠えが魔女の森から聞えてくる。

こんな時間でも大型トラックが通過した。床に散乱した骨たちがかたかた鳴り、ぶら下った縄の大群がゆっくり揺れ動く。光のさざ波が闇の方へじゅんぐりに移動していき、その消えたところにナンシーの骨盤が宙に浮いている。皮のスラックスをはぎ取ったらクジラの大陰唇が現われるだろう。彼女の潮のなかで家主はレントをただにされてしまった。こちらならあのブーツの踵で左手の小指の骨を砕かれるだけではすむまい。解ったと言っておきながら、彼女はクジラの音響をまだ下げてもいないのだ。ひょっとしたら、これは彼女の腸が泣いているのかもしれない。

――来ナイノ？

ナンシーの骨盤が垂直になってこちらに歩いて来た。

焦点のない灰色の空洞の瞳がこちらを見ている。青い血管の浮き出た右腕に何か光るものを握っている。ナイフのようにも思えるし、そうでないものにも思える。いずれにしても一瞬のうちに氷の鉄板がこちらの背中に張りついた。若しこの時ナンシーが大声で笑わなけれ

ば、永遠にインポテンツになっただろう。
彼女はけたたましく笑った。意外だったのは笑った時のナンシーがジェーン・フォンダに似ていたことだ。女優並みに歯並びが綺麗だった。
——殺サレルトデモ思ッタノ？
——エエ、イヤ、イイエ。
——ドッチナノ？　ベビーチャン。
——解リマセン。英語デウマク表現出来マセン。
——ソウ。ココハニューヨークネ。ドコカラ来タノ？
——東京デス。ロスニ半年居マシタ。
——アナタモ、画家ネ。
——マア、ソウイウトコロデス。興味ガアッタラ、見ニ来テクダサイ。
——アリガトウ。デモ、人ノ絵ニハ興味ナイワ。
——モウ、タブロー（画布）ハヤメタノデスカ？
——タブローハトイレット・ペーパーニモナラナイワ。
ナンシーは前の不機嫌さにもどっている。芸術の話題は彼女の膵臓を酸性にするらしい。右手に握っているナイフらしきものが静止している間に逃げ出した方が無難だろう。先週ウエスト・ブロードウェイで彫刻家のダンカンがホールド・アップを食らった。四つんばいに

され、お尻のポケットから七十五ドルを盗られた。犯人は十二歳の少女のグループだ。ダンカンによれば、そばかすだらけの小娘は始終笑っていたと言う。笑っている女は危険だ、とダンカンがわれわれにわめいた。畜生め、カントに毛が生えかかっている小娘にだ！　とダンカンは泣いた。奴が七十五ドルの現金を持っていたことの方が意外だった。彼に五ドル貸しがある。

クジラが一声哀切に鳴く。ナンシーが続いて哀切な表情をする。この鳴き声でエクスタシーを感じているらしい。もう一度、音量を下げてくださいと哀願したら、右手のナイフが胸につきささるだろう。クジラ愛好者にとって日本人は敵だ。パナソニックの日本製のオーディオを使ってクジラの音楽を聴いていることとは矛盾しないのだ。うんこ色の絵がトイレット・ペーパーにならないのも矛盾しない。家主の上にまたがってオナニーするのも矛盾しない。博学のボブによると、ナンシーはレスビアンである。その彼女に男たちがむらがる。これも矛盾しない。世の中で矛盾するものは男が勃起することしかない、とボブの優しい女房がファンドゥーを一緒に食べながら言ったものだ。こちらは Why? What? Why? What? をどろどろのチーズで喉をつまらせながらわめいただけだ。女も勃起するという学説は何かで読んだことがある。ボルネオの女のクリトリスは三センチも勃起するそうだ。スペイン人の男が来て、女たちのクリトリスを切断した。何百年も前の話である。クリトリスに活力を！膣で感ずる女は駄目な女、新しい女はクリトリスで攻撃する、とはアメリカの知的な女性た

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo